

研究テーマ	[IV 見かたや感じ方を広げ、深めること] 色の美しさに対する見かたを広げ、様々な配色から良さを感じ取る力を伸ばす授業の展開 一中学校第 1 学年における、多様な色を見る・使うことのできる題材設定の工夫を通して一
-------	--

神栖市立波崎第四中学校 教諭 並木 愛

1 研究テーマについて（目的・仮説・授業の構想）

造形活動をしていく中で、色彩の扱いは大きな要素となることが多い。色遣い一つで作品全体のバランスが決まり、印象を左右する。鑑賞活動をすると、ほとんどの生徒が色の美しさに触れて感想を述べ、色味だけではなく明るさ、絵の具の質、塗り方など様々な要素に着目しているのが分かる。

しかしその一方で、制作時に色彩を扱うのが難しいという生徒が多く、特に絵画制作における色塗りを苦手と感じている。実際に、混色や重色を充分に行うことができなかつたり、「空は青、リンゴは赤」というように固有色に対する先入観が強かつたりして、対象を深く見つめて色を感じ取ることができない生徒がほとんどである。また色彩感覚が狭いと感じられる生徒が多く、純色や清澄色ばかりを「きれいな色」、濁色は「汚い色」と決めて振り分けてしまう様子もよく見られる。

そこで第 1 学年では、色彩遊びを含む小題材をたくさん行うことにした。前半は、様々な色を扱ってどんな色にも意味や価値を与えられることを理解させたり、色を組み合わせる扱うことの効果や楽しみを味わわせたりできる題材を行った。その後、物の固有色に対する見かたを広げたり、配色がもたらす印象の変化を感じ取ったりする力を伸ばせるようにいくつかの工夫を行った。その実践内容と仮説、成果を実践例の中で述べる。

2 実践例①

(1) 題材名「色・イロ・自分色」

(2) 目標

○三原色を混色することによってたくさん色をつくり出すことができる（技能）

○つくり出した色の良さや美しさ、印象を感じ取り、感じ取ったイメージを言葉で表現できる（鑑賞）

(3) テーマに迫るための手立て

作品製作の中で原色ばかりを使う生徒の多くは混色に慣れておらず、「緑色を作るには何色と何色を混ぜたらよいか」という混色の基本的な知識すらもっていないこともある。本題材で三原色のみを用いてたくさん色をつくらせることにより、混色についての理解が深まり、色をつくる技能も向上すると考えた。そのようにしてつくった色に、すべて名前を付けていく作業を行った。どんな色にも美しさや意味を見出すことができるという体験をさせ、色に対する見かたを広げられると考えた。

(4) 指導計画

色のしくみを学習・色相環づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間
 三原色からたくさん色をつくる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間

(5) 学習の実際

色に名前を付けることが初めから分かっていたので、同系色をつくる際に「すこし薄い色だからメロン色」「ちょっと茶色っぽいから草色」などと繊細な感覚で作り分ける姿が見られた。また初めは、濁色に対して「汚い色」という言い方をしていた生徒も多かったが、「花壇の土色」「校庭の土の色」「海の砂色」などの名前を考えることができた生徒もおり、「湿っている感じがする」「乾いている感じがする」などと、視覚以外の感覚につながるようなイメージをもたせることができたことが分かった。また「なかなか目指す色にならない」とこだわりをもって色を混ぜ続け、つくった色を「この色好き」と大切そうに見つめる様子も見られた。

指導者は生徒たちの様子を見ながら声をかけ、豊かな発想をしている生徒を周囲の生徒に紹介したり、周りにも伝わるように賞賛したりした。それによって、上手くイメージがつかめない生徒も少しずつ活動に取り組めるようになり、個性をあらわしたりこだわってつくったりという意欲を高めることができた。



実践例②

(1) 題材名「ストライプ」

(2) 目標

- 描き加えた色の線が画面のバランスをどう変えていくかを感じ取り、感性をはたらかせてより美しい色彩構成を追求できる（関・意・態）
- 色相や明度、彩度の変化がもたらす美しさを考え、バランスの良い美しい配色ができる（発・構）
- ポスターカラーの使い方を覚え、正しい混色のしかたや水加減を身につけることができる（技能）

(3) テーマに迫るための手立て

色の組み合わせ次第で画面全体の印象が変わる。また、ある一つの色についても他の色と組み合わせることで見え方が変わったりする。それをここでは体験させたいと考えた。

作業の内容を「小さめの画用紙に真っ直ぐの線をたくさん引くだけ」と単純化して、色の組み合わせによる画面全体の変化を感じ取ることに集中できるようにした。まずは「暖色ストライプ」と「寒色ストライプ」の2作品をつくり、似たようなイメージをもたらす色の中でも幅のある表現ができるようにした。次に特に制限を決めない「全色ストライプ」を制作し、複雑な色の組み合わせがもつ面白さを感じ取れるようにした。

(4) 指導計画

- 暖色ストライプ・・ 1時間
- 寒色ストライプ・・ 1時間
- 全色ストライプ・・ 2時間

(5) 学習の実際

前時でポスターカラーの水加減について学習していたが、正しい水加減に調節することが難しかったようで、なかなか思うように制作が進まなかった。また、画面中の好きな場所から線を引いたり、同じ色の線を何本か引いたりしても良かったのだが、その手順をよく理解させることができなかった。画面全体の変化を見ながら制作するというよりは、つくった色を順番に塗っていく形になってしまった生徒も少なくなかった。

暖色・寒色ストライプを作っている時に、緑や紫などの中間色について「どっちだろう」と話し合う姿が見られた。「温かい感じがする」「冷たい感じもする」「どっちも正しい気がする」と意見を出し合い、周囲の色によってその色の感じ方も変わったり、人によって感じ方が違ったりするということに気づいていたようであった。

また色相の変化だけではなく明度・彩度の落差を付けると画面に変化が出て面白いということを見つけていたり、逆に似たような明度・彩度で表現した時の効果を知ったりすることができていた。

実践例③

(1) 題材名「レインボー“食べ物”」

(2) 目標

- デカルコマニー・木版画による表現に興味をもって取り組み、それぞれの技法の特性を生かしてのびのびと描いたり、工夫を凝らして個性的な表現を目指したりできる（関・意・態）
- 色彩感覚をはたらかせて美しく個性的な配色ができる。また描きたいものを見つけてバランスの良い構図を考えることができる（発・構）
- 表現したいイメージに沿って彫刻刀を使い分け、白黒のバランスを考えながら彫ることができる。また摺りの技術を身につけ、正しい方法で美しく摺り上げることができる（技能）
- 白と黒の対比の美しさに気づき、版画の魅力を感じ取ることができる。また彩色によって変わるイメージを捕らえ、配色がもたらす印象の変化を感じ取って価値観を広げることができる（鑑賞）

(3) 題材について

ここまでの題材では、たくさんの色を扱い色そのものの良さや美しさを感じ取る力を高められるような指導を行ってきた。生徒たちも色を扱うことを楽しんで制作し、色彩に対する苦手意識は薄れてきていると感じられた。

しかしここで物の色を感じ取って描くとなると、まだ固有色のイメージにとらわれてしまうのではない

かと考えた。そこでまずは、物の固有色に対する先入観を取り除くために、モチーフに縛られずに色を塗ることができる表現方法を考えた。本題材では先にデカルコマニーを用いて版画用紙をカラフルに染めておき、そこに白黒の墨版を摺る。「リンゴは赤」という先入観に反するような配色にも良さや美しさがあることを実体験させ、物の色の表現について考え方を広げたい。

版画用紙を染める際にデカルコマニーを用いたのは、絵の具を紙で挟んで広げることで作者の意図しない混色や滲みが生まれ、自分が意図的につくり出す範囲を超えた色を使うことができるからである。

また版画を用いることで、配色を変えた作品を複数つくることができる。同じ形でも配色によって印象が変化するというをはっきりと見比べることができ、それぞれの印象も捉えやすくなるのではないかと考えた。

相互鑑賞では配色の違う作品を比べ、そこから受ける印象を“「食べ物」のつぶやき”として言語化させる。それを他の友達と共有し、配色から受ける印象の変化を確かめさせたり、様々な見かた・感じ方に触れさせて自分の価値観を見つめたりできるようにした。

(4) 指導計画 (11 時間扱い)

時間	学習活動	評価の観点			
		関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
3	デカルコマニーで版画用紙を染める。	表現技法に興味をもち、色の重なりや滲みの美しさを楽しみながら意欲的に制作できる。		デカルコマニーでの制作手順を身につけ、美しく制作できる。	
2	彫りの練習を行い、自由彫りで習作を作る。	彫刻刀を積極的に使ってそれぞれの刀の効果を確かめたり、生かしたりしようとする。	全体のバランスを考え、美しい画面構成で制作できる。	彫刻刀の使い方を身につけ、それぞれの刀を効果的に使って制作できる。	
2	モチーフと画面構成を決定し、彫刻刀で版をつくる。	彫刻刀の効果を生かし、モチーフの美しさを生き生きとした線で、工夫して表現しようとする。	描きたい物を選び、モチーフのイメージから背景のテクスチャを考え、美しく画面構成できる。	彫刻刀を自分の思うままに使い、イメージしたように版をつくることができる。	
3	試摺りと加筆を繰り返しながら完成に近づけていく。	試摺りした作品を見ながら、よりよい作品に仕上げようと粘り強く取り組むことができる。	画面全体のバランスを考えて仕上げていくことができる。	正しい摺り方を身につけ美しく印刷できる。	
1 (構)	相互鑑賞を行い、互いの作品から受ける印象を伝え合い共有する。	配色の違いから生じる印象の変化を感じ取ったり、互いの見かた・感じ方を知ったりすることを楽しみ、積極的に活動できる。			配色の違いから生じる印象の変化を感じ取り、言語化することができる。 他者の感じ方を受け入れ、自分の価値観を見つめ直すことができる。

(5) 本時の学習

ア、目標

- 配色の違いから生じる印象の変化を感じ取り，言語化することができる。
- 他者の感じ方を受け入れ，自分の価値観を見つめ直すことができる。

イ、準備・資料

作品（提出させておく），付箋紙（できれば吹き出し型のもの），ワークシート

ウ、展開

時間	学習活動・内容	支援と評価 (△：努力を要する生徒への手立て) (□：学習の進んだ生徒への手立て)
↑ 10 ↓	<p>1 本日の学習内容を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">互いの作品を鑑賞し、「食べ物」達のつぶやきを感じ取ろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・“「食べ物」のつぶやき”という鑑賞方法に興味をもつ。 ・鑑賞の手順を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は作品の表面的な良さではなく，作品から感じ取れるイメージを大切にして鑑賞を行うことをしっかりと伝える。 ・グループ分けは，作品の内容や完成度などからバランスを考えて，あらかじめ教師が設定しておく。
↑ 20 ↓	<p>2 班の中で誰か一人の作品を選び，それぞれ配色の違う作品に描かれた「食べ物」のつぶやきを考え，ワークシートに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜそのつぶやきが聞こえてきたのかも考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員の作品に良さがあることを伝え，全ての作品を見る時間を少し与える。 ・色々な配色で作っている人の作品を選ぶと良いことを助言する。 <p>△：作品を一緒に見ながら，受ける印象などを聞き出し，言語化を手助けする。</p> <p>□：つぶやきを詩的に美しく表現したり，「食べ物」に名前を付けてみたりと発展的な活動を促す。</p> <p>【評】それぞれの配色からイメージを感じ取って言語化し，互いの考えを知りながら価値観を磨くことができているか。（鑑賞・ワークシート，観察，対話）</p>
↑ 13 ↓	<p>3 各自が考えたつぶやきを付箋紙に書いて作品に貼り，互いの考えを比べ，話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・班を回って活動の様子を見ながら，配色による印象の違いや，人によって感じ方が違うことに気づかせるよう声をかけていく。 ・活発な話し合いがされている班を賞賛し，良い考え方が出てきていたらそれをひろっておき最後に伝えるようにする。
↑ 7 ↓	<p>4 本時の活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・“「食べ物」のつぶやき”を考えた感想や，班の仲間の意見を聞いて考えたことなどをワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の話し合いの様子を報告させたり教師から紹介したりして，良い意見を全員で共有する。 ・感想を書く時には会話や作業をやめさせ，しっかりと自分の内面を見つめられるような環境を作る。

(6) 学習の実際

本題材の制作においては，まずデカルコマニーを非常に楽しんでいる様子が見られた。鮮やかな色から鈍い色，濃い色や薄い色，色面一つあたりの大きさなど様々な変化を付けた多様な作品が生まれた。また筆を左手で持ってみたり，ドリッピングを自然にやり始めたりして描き方にも工夫が見られた。教師はそれらの活動を認め賞賛し，周囲に紹介し広めながら，更にヒントを与えて盛り上げた。

その後、色を染めた紙に墨版を重ねるところを実演すると、生徒たちは歓声を上げ、「自分も早く摺りたい」と非常に積極的に印刷に取り組んだ。また、摺った後に色のバランスを見比べて、「この作品はぱっとしない」



「この色が意外と良かった」などと自然に自分の作品を鑑賞し、墨版を更に彫り進めて色を出そうとしたり、違う色でもう一枚紙を染めて印刷したりと工夫を重ねていた。あるクラスでは新聞や折り込みチラシに印刷をしている生徒が出て、「新聞に印刷すると渋くて落ち着いた感じがする」「チラシに印刷すると変な感じがする」などと言っていたので、完成作品をその場で一緒に鑑賞しながら、色だけではなく紙の質感という視点も紹介し、その後クラス全体や他クラスの授業でも紹介した。

最後の相互鑑賞では、「食べ物のつぶやきを拾う」という活動が、生徒によっては非常に難しかったようで、ねらいにそって熱心に活動に取り組む生徒と、そうではない生徒にわかれてしまった。

熱心に取り組めた生徒は、作品に登場する「食べ物」のつぶやきを楽しそうに考え、紹介し合っていた。さらにそれぞれの食べ物に名前を付けたり、出身地や性別、性格や家族構成などの設定も考えている様子が見られ、その判断基準は多くの場合配色から得ていたようであった。机間巡視しながら生徒に話を聴くと、「この模様（彫り跡を指して）だからこう思う」「この色だからこう感じる」などと理由も説明していた。またその会話を聞いていた周囲の生徒がその話に加わり、意見に同調したり自分の考えを話したりしていた。



活動が困難だった生徒は、作品の内容と関係なく自分の好きなセリフを書いたり、セリフを書いても「なぜ？」と問われると「何となく」と答えたりしていた。また、「全く思いつかない」という生徒もあり、「この色はどんなイメージ？」「この作品とこの作品はどう違う？」などと助言をして、セリフは考えつかなくても作品の特徴や、印象などを話させた。それらの生徒たちについては、できる限り助言を行い、到達点を下げる（4作品のうち2作品のセリフだけ考えるなど、生徒によって）などして活動を促し、その後の発表の時に友達の見聞をしっかりと聞くことでできなかった分を取り戻そう、と声をかけた。



考えたセリフをお互いに発表し合うと、「意見が似ていた」「すごく意外な言葉が出てきた」など、自分の考えと友達のことを比べて、友達同士の意見を比べてしながら自然に話し合いが始まった。自分でセリフを考えられなかった生徒もここでは楽しそうに友達の見聞を聞き、話し合いに参加していた。また発表を終えた後に各自が書いた感想は、友達の見聞に感心したり、色々な見方があることに気づいたり、色のもたらす印象について述べているものがあつたりと多様であった。

3 成果と課題

これらの題材を通して生徒たちは、制作時に扱う色彩の幅を広げることができ、初めの課題を行っていた頃には「汚い色」として捉えていた濁色を、最後の課題では自然に画面に取り入れてその良さを見つけ、微妙な色の違いを細やかに感じ取ることができるようになってきた。

最後の題材については、「食べ物のセリフを考える」という鑑賞方法が、生徒によってはあまり良い方法ではなかったと思われるため、鑑賞のヒントの与え方や、鑑賞の方法そのものを工夫改善していく必要があつた。

さらに、これらの活動を1年生で行った生徒たちが2年生になり、色紙をつかった平面構成や、水彩絵の具で手を描く課題に取り組んだ時にも1年生の学習が生かされていた。色紙平面構成では、色によって喚起されるイメージや色同士の響き合いを感じ取り、じっくりと考えながら作品を制作していた。手の着彩では肌の基調色や細かな陰影、しわ、すじ、などの色に注目し、「この色は少し違う」「もう少し赤い」「黒すぎた・・・」

などと最後までこだわりをもって制作できる生徒が多かった。血管などの少し青みがかった部分にも敏感に反応し、繰り返し色を重ねながら本物の色に近づけていこうとしていた。

今後の課題はその感性を実際の制作に生かすことで、そのためには確かな技能が必要であると感じた。せっかく良い見かたや感じ方ができても、自分が見たままに色を使ってあらわしたり、感じたイメージをもとに色を使って再現したりすることができずに、苦手意識をもっている様子の生徒も見られた。「この色はやっぱり違うのかな」「思い切って塗ってみたら変になった」などの発言も見られ、多様な色を扱うことへの抵抗感につながりかねない様子であった。その都度技術的な指導を行ってできたことをほめたり、アドバイスを言って励ましたりした所、最後には「諦めなければ何とかなる」「失敗したと思っていたらそれが意外と良い結果になった」などという声も聞かれるようになったが、やはり「失敗した」と考える生徒もいた。「見ること・感じ取ること」と「あらわすこと・つくること」を分けて一つ一つ学ばせたり、総合的に学ばせたりして、それぞれの力を伸ばしつつ、相互に関連していくように、題材設定の工夫をこれからも続けていきたい。



《参考にした実践》

実践例①の「色・イロ・自分色」は角谷直人先生の実践、実践例②の「ストライプ」は相馬誠司先生の実践をもとに、本校の実態に応じて取り入れさせていただきました。先生方、本当にありがとうございました。